

寄稿

ありがとう——生みの親・育ての親の皆様 ABICの辿ってきた道



池上 久雄（いけがみ ひさお）

NPO法人 国際社会貢献センター 顧問（前 理事長）
社団法人 日本貿易会 参与（前 常務理事）
東京大学 理事

1. ABIC誕生

1997年7月、タイのパーツ暴落を引き金に始まったアジア経済危機は、その後98年に入ってますます深刻となり、日本経済にとっても深刻な事態となっていました。日本貿易会も通産大臣を招いて、アジア支援の緊急要望を提出し、特別借款制度創設の糸口をつけるなど、活発に活動していました。並行して大蔵省岸本周平アジア通貨室長（役職は当時、以下同じ）、通産省塩沢文朗技術協力課長から、金だけでなく顔の見える援助として、商社のシニア・OBを各国政府のコンサルタントとして送り込みたいとの要請を受け、日本貿易会人事委員会で人選方法等を検討しました。これが後のABIC誕生の伏線ともなったわけです。

一方98年12月には、「特定非営利活動促進法（俗に言うNPO法）」が施行されました。海外ではNPO・NGOなどがすでに数多く活動しており、国際的な活動を通じてNPOに接するチャンスの多い商社にとって関心の高い話題で、運営委員会に諮って、99年4月に、8商社による「NPO研究会」を立ち上げました。座長には三井物産から田形博敏業務部主任コーディネーターを、またアドバイザーとして三井物産戦略研究所長寺島実郎氏を迎え、日本貿易会高橋坦理事および企画グループを事務局として活動を行い、年度前半ではNPO全般の研究を、後半では商社としてNPOを設立して社会のための活動を行うことの可能性を検討しました。

途中、商社自らがNPO活動を行う意義やリスクの問題等をめぐって激しい議論もありましたが、最終的には「国際社会貢献センター」を日本貿易会の内部組織として設立すべしとの研究会提案が発表され、2000年度事業の一つとし



室伏 稔 氏



上島 重二 氏

て「正副会長会」に付議され、室伏稔会長、上島重二副会長はじめ全員一致の賛成を得て、2000年4月、正式に発足の運びとなりました。

2. 活動開始

生まれたばかりの国際社会貢献センターに大変力強い戦力が次々と駆けつけてくれました。2000年5月、三菱商事から常務理事・事務局長として出向した宮内雄史氏は、直ちに積極的な活動を開始しました。続いて7月には元日本貿易会宇佐見和彦常務理事がコーディネーターとして参加、元丸紅財務担当役員の経験を生かして、組織体制を固めました。また、故丸紅小河南業務部長は、国際社会貢献センターの趣旨に賛成して、同社宇崎雅雄氏の、立ち上がり一年間のコーディネーターとしての応援派遣を決めるとともに、全丸紅OBに、自らの名前で国際社会貢献センターの紹介と参加を勧める旨の手紙を出してくださいました。

センターの英語名については、後ろから強力に支えていた日本貿易会高梨圭介専務理事が「Action for a Better International Community (ABIC)」を発案、関係者全員のサポートを得て、以後センターの愛称となりました。

2000年7月に着任した宮原賢次^{ひょうぼう}会長は、「世界を豊かに貿易会」を標榜して活動を始めま

したが、ABICの活動はこの中心を占めるものとして、以後終始先頭に立って日本の経済界にABICの存在を強くアピールしてくれています。

人材派遣第一号は、ABIC正式発足前から関心を寄せてくれていた通産省技術協力課による、ハンガリーへの専門家派遣でした。以後、同課は桜井繁樹課長時代も変わることなくパキスタン、インドネシア、ボリビア、エジプト等々、次々と専門家を採用してくれています。



飯村 豊 氏



阿部 英樹 氏

また、外務省では当時の飯村豊国際協力局長と粗信仁政策課長がABICの構想を大変評価してくださり、シニアボランティアのグループ派遣のアイデアを示してくださいました。さらに国際協力事業団(JICA)の阿部英樹理事、小槌山覚派遣部長、武下悌治課長等、シニアボランティアの責任部局の方々を紹介してくださり、以後これらの方々はシニアボランティアの派遣について引き続き強力にとり進めてくださっています。

商社マンとしての国際経験を大学の授業に生かして、若い世代につなげていけないだろうかと考えて相談した早稲田大学原輝史教授は、かつて所長を務めていたエクステンションセンターに推薦してくださり、2001年から複数講師のオムニバス方式による講義が実現しました。この形式はその後の大学講義の原型とも言えるもので、大学講義の領域が大き

く発展していく基盤となりました。

また外国人留学生在日本滞在中に苦労した結果、日本嫌いになってしまう例まで海外で見てきた私たちは、留学生を支援したいという強い気持ちを当初から持っていました。日本国際教育協会の菅原正弘常務理事は、当時建設中だったお台場の東京国際交流館を自ら案内し、1,000人規模の留学生会館に宿泊する留学生とその家族のための積極的な支援活動を要望されました。

中小企業の国際化支援も柱の一つとして当初から取り組みましたが、その第一号は信濃ワインのフランスとの提携支援でした。日本商工会議所でのABIC活動の説明会の記事を読んだの申し込みで、それ以後ABICでは、信濃ワインが愛飲されるようになりました。

このように、第1年目(2000年)の日本貿易会の一部局としての活動を行っていくうちに、後の5つの柱となる活動の基礎が固まってきました。このころの会員数は、300人から500人と徐々に増えていきました。

3. NPO法人格の取得

並行して、2000年春に商社8社の委員による「NPO法人格取得に向けての準備委員会」(西川徹委員長 住友商事市場業務部部长代理)を立ち上げ、6ヵ月の準備ののち、2001年早々に日本貿易会の定款に社会貢献活動を行う旨を修正したうえで、資格取得に向けて東京都に申請を提出しました。企業グループ(ことに業界)によるNPO申請は第1号とあって、多少難航しましたが、同年5月、晴れてNPO法人格が認められました。

宮原会長主催による発足記念パーティーには、飯村豊外務省官房長をはじめ、横原稔三菱商事会長や国際交流基金藤井宏之理事長、

JICAならびにJETROの幹部などが多数出席してくれて盛大な出発となりました。また8月にお台場の国際研究交流大学村で行った活動会員による祝賀会は、生みの親でもあり個人正

会員でもある寺島実郎氏に、NPO活動の意義についての講演を行っていただいて、皆、大変感銘を受けました。

さらに、ABIC活動の出発にあたって、大変大きな出来事となったのは、高齢者雇用開発協会(征矢紀臣理事長)から、日本貿易会の高齢者雇用促進検討会の活動が、定年後の雇用促進に寄与するとの認定を受けて、年間1,300万円余の補助を2年間にわたって支給されたことです。ABICが日本貿易会から雇用促進活動の委託を受ける形で、この資金が有効利用されて、調査費用・広報費用等ABICの立ち上げりの大切な時期を支えてくれました。



寺島 実郎 氏

ABICを支えるコーディネーター陣

総務・経理	宇佐見和彦	元 丸紅
留学生支援	千野 滋樹 山田 雅司 佐藤 徹	元 丸紅 元 伊藤忠商事 元 伊藤忠商事
大学、エクステンションセンター講座	和田 稔 増田 政靖 森 和重 布施 克彦 猪狩 真弓	元 兼松 元 三菱商事 元 三井物産 元 三菱商事 元 三井物産
小中高校国際理解教育	藤村 登 細野 良敦	元 三井物産 元 三菱商事
中小企業支援	高廣 次郎 篠田 正義	元 三菱商事 元 三井物産
メコンデスク インドネシアデスク 中国デスク 外国企業支援 IT研修	吉川 和夫 橋本 政彦 久佐賀義光 大道 豊彦 中島 隆一	元 トーメン 元 日商岩井 元 三井物産 元 住友商事 元 丸紅
デ関ス西ク	藤原 照明 大西 稔男 赤田 堅	元 丸紅 元 三井物産 元 丸紅



発足当初のスタッフ

4. 順調に発展する活動

こうして始まったABICの活動は、順調に発展してきたと言えるでしょう。立ち上がりには多少苦戦した小中高校の国際化教育支援も文部省国際教育課田中正朗課長のご尽力で、全国の教育委員会に紹介して下さったこともあり徐々に実例が増えてきました。

また、中小企業の国際化支援の分野も千葉県との包括契約や、東京都の支援ナビゲーターへの一括採用など実績が上がっています。

大学での国際ビジネス・国際経営・国際事情等の講義は20数大学、延べ160人近くとなり、名実ともにABICの主要分野のひとつとなってきました。登録された活動会員も1,400名を超えました。また2002年12月、念願の関西デスクも開設し、関西学院大学（平松一夫学長）との産学協同プロジェクトも、新しい試みとして滑り出しました。

また、新たに日本貿易会から扇文子事務局長代理が着任し、事務体制も整ってきました。今までの、活動を支えてくれた最も大切な方たち——これはABIC発足から今日まで、悩み

ながらも着々とABIC活動に取り組んでくださっているコーディネーターの方々であり、またさらに裏からこの活動を支える日本貿易会のスタッフたちであることは言うまでもありません。

5. さらなる飛躍へ

2003年7月、吉田新理事長、野津新事務局長が着任し、ABICは新しいリーダーシップの下にさらに飛躍しようとしています。

本年5月末には、先頭に立って引っ張ってきて下さった宮原賢治会長から佐々木幹夫新会長に代わってさらに大きく脱皮していくことでしょう。

大きな期待とともに、今まで「生みの親」「育ての親」として貢献して下さったすべての人に感謝申し上げて、この稿を終わりたいと思います。有難うございました。 ■